

自分たちにできることを考えよう、とりくもう。防災教育部会

9月～1月にかけて、南あわじ市立阿万小学校で「きばっとらんかよ阿万っ子～自分たちにできることを考えよう、とりくもう～」と題して、4年生の総合学習で防災教育をおこないました。「きばっとらんかよ阿万！」は、阿万地区の地域づくり協議会が「地域の存続と住みやすい地域づくり」を目的として、合言葉にしている言葉です。様々な地域イベントの中で子どもたちにもなじみのある言葉で、子どもたちに「自分たちで考え、とりくんで欲しい」と、4年生の総合学習のテーマとしています。

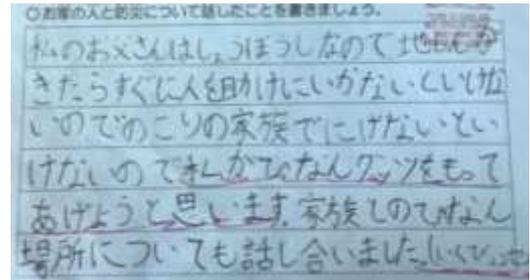
阿万小学校は淡路島の南西の海岸近くに位置する学校であり、南海トラフ大地震の被害が想定されている地域でもあります。毎年4月には近隣の保育所と合同で高台避難訓練を実施しているほか、24年11月17日には8年ぶりの地域単独防災避難訓練を実施しました。子ども（141人）、保護者、自治会、老人クラブ、地域づくり協議会、社会福祉協議会、消防団、市の危機管理部局等400人以上が参加し、地域ごとの高台避難訓練や小学校への移動訓練、防災スタンプラリー、炊き出し訓練、6年生による防災学習の発表を実施するなど、防災に対する意識は比較的高い地域です。



6年生発表の様子



アイマスク、車椅子避難訓練



子どものふりかえり

4年生は、授業者が3年生から持ち上がった28人のクラスです。防災教育部会協力研究所員の「防災の学習は、他の教科と比べて学習者の知識量による差が生じにくい。家庭への呼びかけにもなるから参観日にぴったりだ」という言葉が印象に残っており、3年生の時に授業参観で「非常防災バッグの中身を考えよう」という学習を実施しました。子どもたちの真剣ながらも楽しんで学ぶ表情が見られ、「防災学習にむき合うことで、大きな成長につながるきっかけの1つになるかもしれない」という思いを抱きました。夏休み明けには、ある子どもが、非常用防災リュックをつくったことを写真と文章でつづったスケッチブックを学校に持ってきたこともあり、「夏休み、宮崎県で地震があったからつくろうかってなってん。お兄ちゃんは嫌やって言ってやらなかったけど、俺はがんばった！」と嬉しそうに話をしていました。中身を見ると「水はたくさんいるけど、走れなくなるから500mLを3本にした」や「避難所では走り回れないから、折り紙とまちがい探しの本を入れた。これで、ちょっと我慢できるかも」などと書かれていました。「よっしゃ！これは、廊下に掲示して全校生に見えるようにしとこ」と伝えると嬉しそうに笑いました。他の教科でも意識していた「授業は子どもたちのもの」を防災学習でも展開したいと考え、防災教育部会の方々にご意見をいただきながら単元づくりにとりくみました。

社会科の学習と結び付けながら、主に次のような学習を展開しました。

- ①阪神・淡路大震災の語り部の方の講話
- ②家族に当時の阪神・淡路大震災についてインタビュー
- ③当時小学生だった担任の語り

これらの活動は、協力研究所員の方から「自分事という言葉が一人歩きしてはいけない。上辺だけの自分事にしないために、例えば2つの身近があげられる。1つは身近な地域について学ぶこと。もう1つは身近な年齢から学ぶこと。子どもたちと同じような年齢で被災した方のお話を聞くことも一つの方法である」という言葉をもとに、授業者ができることを考えとりくんだ内容です。

学習をすすめていく中で、福祉学習と防災のことを結びつける子どもたちの姿も見られました。「災害があった時、障害のある方はどんなことに困るの?」というつぶやきもあり、次の活動にもとりくみました。

④障害のある方が阪神・淡路大震災当時どのような様子だったのを聞く。

⑤実際に小学校へ来ていただき、どんなことに困りそうかを教えていただく。

実践をすすめていく中で、子どもたちの中からぼんやりと活動のゴールが見えてきました。「自分たちが学習したことをだれかに伝えたい」というもの

でした。授業参観でお家の人に伝えるという案や、低学年に発表したいという案が出る中、「どうせならたくさんの人に伝えたい!」という声が上がリ、毎年実施している1.17追悼集会で発表の機会をもてることになりました。

この発表にむけて10月18日に、防災教育部会の授業研究をおこないました。本時の目標は「これまで学習したことの中から、伝えたいことを考える」です。授業者は、始めの5分程度、学習をふり返るところまでは話し、その後はすべて子どもたちだけですすめました。導入部分では、イメージマップを用いて伝えたいことを広げ、グループごとにホワイトボードでまとめました。その後、それぞれのグループの意見を比較して、4年生として何を伝えたいのかを整理する活動でした。子どもたちだけですすめた話し合いの結果「命を守るために自分たちにできることを伝える」という意見にまとまりました。ぼんやりと発表をしたいと思っていたところに、「自分たちが学んだことを伝えることで、誰かのいのちを救えるかもしれない」という決意が加わったように思います。事後研究であげられた課題としては、グループでの話し合いがうまくすすまない場合や、具体を抽象化していく場合のアプローチがもっと必要であったのではないかとということがあげられました。例えば、伝えたいことを「災害発生前、災害発生直後、その後」といった時系列にわけて考えさせることで、意見がまとまりやすかったのではないかとこの話も出ました。また、予定調和でない学びであるからこそ、どのように教職員が関わっていくか、見えないレールを敷いてあげることも大切だという意見もありました。そして、防災の学習をすすめている時に、心のケアについて考える機会が少ないという課題も浮き彫りになりました。



車椅子の方との福祉学習



班ごとに考えを整理する



班ごとの意見を比較し、考えをまとめる

「1.17追悼集会」では、「いのちを守るために自分たちにできること」というテーマで、全校生・教職員にむけて調べたことを発表しました。「過去の震災、災害が起きる前にできること、直後にできること、発災後時間が経ってできることなど」を発表しました。発表後、他学年の子どもたちや教職員から「勉強になったよ!」と声をかけられたことを嬉しそうに話す子どもたちの姿がありました。また、「先生、防災の学習ってこれで終わったらアカンよな」と真剣な表情で話す子もいました。まだまだ課題もありますが、防災学習を通して子どもたちが「自分たちにできること」を考える姿が広がっています。